

『Seeing Red』

彼女の第一印象は、何よりも、くちびるだった。他はまったく化粧気のない顔に、くちびるだけが、真っ赤に、濃く、艶々と塗りこめられていた。

国の大学に留学して現地で受けた授業の初日、彼女は少し遅れて教室に入ってきた。幾つかまだ空席があり、私の隣も空いていた。その日彼女は私のとなりに座り、そのまま私たちは教室で、毎日、隣同士に顔をあわせた。

彼女の中国語は、こちらが同じレベルにいるのが嫌になるほど上手かった。5 レベル設定されていたうちの上から 2 つめという、その上級寄りの中国語クラスに私がいたのは、ひとえに、プレースメントテストが筆記試験のみだったからという理由にすぎない。聴く・話す能力が読む・書くよりも大幅に低かった私の耳には、彼女の話す中国語は私のよりずっと、それどころかクラスの誰よりも、自然でなめらかなものに聞こえて羨ましかった。

彼女は、中国系華僑で、ふだんは、スペインに暮らしているという。漢字の名前も持っていたけれど、スペイン名で呼ばれることを好んだ。授業には毎日のように遅刻してきたが、どんなに遅れても、くちびるだけはいつも、きっちり塗ってあった。

初冬のある日、ふだんは地味な色ばかり着ていた私たちの先生が、青空色のふっくらしたカーディガンを羽織っていた。私の好きな色だ。なんだか嬉しくて、「先生、それきれいです。似合います」というようなことを言った。すると、隣席の彼女が私を見て、何やら強い言葉を吐いた。けれどその中国語が、私にはわからない。文字で書いてもらって、辞書で調べた——「おべっか使い」。

「どういうこと？」授業が終わって、彼女に尋ねる。語気が強くなっていた。

「だって、その通りじゃないの。あんなださいカーディガンを褒めるなんて。本当に似合ってたと思うわけじゃないでしょう？試験が近いから？」

仰天した。「私にとっては、服をほめるなんて普通のことだよ。成績のことなんか考えてなかったよ。本当に、似合ってると思ったよ」

彼女はしばらく黙っていて、それから、「本当に似合っていると思って言ったんなら、私が悪かったわ。ごめんなさい」と謝った。けれどそうされると今度は、こちらが、〈自分のなかに、先生に取り入りたい気持ちが本当に無かったかどうか〉を、考えこむことになった。同時に、彼女に対する興味がわいた。誘って、ふたりで昼食をべた。

食堂で食事を終えるころ、彼女は紙ナプキンを何枚も細かく割いて、ゆかにばらまいた。「なんでゴミを作ってるの?! なんてことしてるのよ」と止めると、「食事に満足したからよ。それに、見てみなさいよ。この食堂の壁際に、何人のウエイトレスが並んでいるか。私はあの人たちに、仕事を作ってあげているの。もしもお客さんがあんなみたいなの、小ぎれいにけちくさく食べようとする人ばかりなら、あの人たち失業しちゃうわよ」と言われ、その時もまた、喧嘩になった。

夜中、酔っぱらった彼女が、部屋に転がりこんできたこともあった。私たちの住んでいた留学生寮はオートロックで、鍵を忘れて外に出ると、管理人に開けてもらわなければならなかったが、夜中は、管理人も時々、不在にしていた。それで自分の部屋に入れず、私のところに来たわけだが、口がたいへんに酒臭かった。

「歯みがき粉が洗面所にあるから、磨いてきて」——言ったのはそれだけだったが、私としては、彼女が自身の指にペーストをつけて磨いて、というのは、当然のことだった。だから彼女が、私の日々使っている歯ブラシを咥えているのを見たときにも、やはり驚いたし、腹が立ったし、拒否感もあった。私の様子を見て、彼女も怒った。「私たちは友だちなのに、私はあんたの歯ブラシも使えないってわけ?!」

私たちは、友だち、だったのだろうか。よくわからない。一緒にいる時間は長かったが、互いに、互いを奇妙なものとして観察していたような気もする。

次の学期、また新しい留学生たちが来て、そのなかに、彼女に猛烈に惚れ込んだ人がいた。彼女も満更ではなかったようで、やがて周り中が認める恋人同士になっていた。彼女は彼と過ごす時間が長くなり、私と彼女は、その後何度か大きな喧嘩をしたこともあって、疎遠になった。そのまま留学期間が終わり、私は中国を離れた。彼女も同じだったはずだ。最後にたまたま見かけたときにも、彼女のくちびるはやはり、ぽってりと赤く塗られていた。